

ごあいさつ

代表世話役 西本 孝

6月9日に総社市の鬼城山ビジターセンターで、2024年度の年次総会を開催し、NOI岡山も新しい年度が始まりました。総会の最中に強く降っていた雨は、午後の自然観察会が始まる頃にやみ、鬼城山の特別保護区内で希少な湿原の動植物をじっくりと観察することができました。古代城という文化財と湿原生態系という異なる観点での保護のせめぎ合いがあったことを萱原さんから聞き、互いの立場をぶつけ合って、大切な方向をまとめ上げるという重要な役割を萱原さんが果たしていたことも知り、地域の自然保護活動をする上で、とても重要なことを学びました。また、総社市環境課の皆さんにも大変お世話になりました。

今後の活動について、会員の皆さんが、それぞれの地元での活動を活発化させてください。観察会の企画運営、自然保護活動など遠慮なく相談してください。一緒に発展させましょう。

活動報告 (2024年4月~6月)

第29回自然観察会—早春の毛無山の植物

- 開催日：4月28日(日) 10時~14時
- 特徴：早春の植物を観察
- 場所：毛無山(新庄村)の登山道
- 当日の様子：若月さんが報告(後述)

勉強会

- 勉強会：5月12日(日) 13時~16時
- 内容：3月の指導員講習会の反省会と新規指
- 場所 e-Tam 自然と教育研究所
- 導員との意見交換

年次総会と第30回自然観察会

- 開催日：6月9日(日) 10時~15時
- 自然観察会：13時~15時 自然保護区で、
- 場所：鬼城山ビジターセンター
- 場所 e-Tam 自然と教育研究所
- 総会：10時~12時 年次総会
- 当日の様子：萱原さんが報告(後述)

今後の活動予定 (2024年12月まで)

勉強会

- 日時：7月28日(日) 13時~16時
- 場所 e-Tam 自然と教育研究所
- 内容：築地さんから、児島湖の話
- 連絡先：西本まで

県外研修(自主活動)

- 日時：8月3日(土)~5日(月)
- 連絡先：西本まで
- 場所：紀伊半島のジオパークなど

第31回自然観察会—アッケシソウ

- 日時：10月20日(日) 10時~13時
- 場所：寄島町のアッケシソウ自生地など
- 内容：「岡山県の生物多様性のホットスポットを訪ねて(5)」
- 連絡先：西本 taknishi@js4.so-net.ne.jp
- その他：少雨決行

講演会と忘年会

- 日時：12月15日(日) 13時~18時
- 講演会：藤崎憲治先生(京都大学名誉教授)
- 内容：気候温暖化が昆虫に与える影響—その直接効果と間接効果
- 場所：e-Tam 自然と教育研究所
- 連絡先：西本まで

活動報告

第 29 回自然観察会—毛無山の早春の動植物 2024 年 4 月 28 日

若月 隆

1. 概要

- a 日 時 2024 年 4 月 28 日 (日) 10:00~16:00
毛無山ビジターセンターに集合
- b 場 所 毛無山登山道を 7 合目付近まで往復
- c 参加費 無料
- d 内 容 観察会 遊歩道を散策しながら早春の動植物を観察
草寄せ 近くの田浪採草地に移動後草寄せ作業
- e テーマ スプリングエフェメラル (春の妖精)



写真 1. 毛無山ビジターセンター

2. 報告

a 集合から出発

毛無山は、鳥取県と岡山県にまたがる標高 1218 メートルの山で大山隠岐国立公園の一部です。今回の観察会は、3 月に行われた第 606 回自然観察指導員講習会で新たに指導員に加わった新人 6 名も参加した。当日は私たち以外の一般の登山客も多く、毛無山ビジターセンター駐車場は私が到着した時点でほぼ満車状態でした。参加メンバーが全員揃うまでのあいだ、周囲に生えている食べられる野草を教えてもらい、野草を食べて待ちました。



写真 2. 毛無山の家の前の芝生広場でスミレの観察から、観察会は始まった



写真 3. スギ林の中の水たまりからは、タゴガエルの鳴き声が聞こえてきた

b 観察できた主な植物

今回の観察会で観察できる植物はアカイタヤ (赤板屋) ムクロジ科にはじまり、ヤマブキ (山吹) バラ科まで 56 種類を数える。(早春の毛無山—自然観察会資料参照) さすがにすべての植物を観察できた訳ではなく、そのうち確認できたものは、①エンレイソウ (延齡草) シュロソウ科、②オオカメノキ (大亀の木) ガマズミ科 (写真 4)、③オクノカンスゲ (奥の寒菅) カヤツリグサ科、④クマシデ (熊四手) カバノキ科、⑤クロモジ (黒文字) クスノキ科、⑥サカゲイノデ (逆毛猪手) オシダ科、⑦タチツボスミレ (立坪堇) スミレ科、⑧ツクバネソウ (衝羽根草) シュロウソウ科 (写真 5)、⑨トキワイカリソウ (常盤碇草) メギ科 (写真 6)、⑩ノブキ (野蓐) キク科、11 ハウチワカエデ (羽団扇楓) ムクロジ科、12 ハシリドコロ (走野老) ナス科、13 ホウチャクソウ (宝鐸草) イヌサフラン科、である。途中もっとたくさん説明を受けたと思うが、資料に を入れることができたのはこれら 13 種類ほどだった。



写真 4. オオカメノキ



写真 5. ツクバネソウ



写真 6. トキワイカリソウ

今回配布された資料には植物名をカタカナ表記、漢字表記、分類名と3つに分けて記されていた。調べてみると植物名はカタカナで表記するという新聞業界の慣習？があったらしい。しかし資料のように漢字表記があると、その植物の命名の由来がよくわかる。さらに分類名までであるとさらに掘り下げができた。

c 観察できた鳥類

今回の観察会ではおもに植物を中心に視覚的観察が進みましたが、観察を進めていくと静寂な空間に鳥たちの鳴き声が響きわたりました。聴覚的に観察された野鳥は、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ（キツツキ科）、ハシブトガラス（カラス科）、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ（シジュウカラ科）、ウグイス（ウグイス科）、ゴジュウカラ（ゴジュウカラ科）、ミソサザイ（ミソサザイ科）、ソウシチョウ（チメドリ科）などでした。なかでも特によく響き渡った野鳥の鳴き声は「ミソサザイ」だった。静寂な空間に染み入るような鳴き声が響き渡り、耳を奪われるような、そんな美しい鳴き声だった。



d 歴史と自然観察

5合目を過ぎたあたりから、周辺の樹木に変化が現れる（写真7）。出発してから登山道は天然のスギの中を抜けてきたが、5合目付近からブナの大木やホオノキが現れはじめた。個人的な話になりますが、最近木樵の友人からホオノキの薪割り台をもらった。ホオノキの薪割り台はすごい。食い込んだ斧の刃を包み込むように柔らかく、斧をぬいた後その切り込みは消えてしまう。どれだけ力を入れて斧を振っても、薪材のように割れることは決してない。生きたままのホオノキを見ることができて、とてもうれしかったです。



写真7. 何となく味がある標柱

ホオノキの増え方はおもしろい（写真8）。普通の樹木が種子が芽生えて増えていくのに対し、ホオノキは根元のあたりから蘖（ひこばえ）のような子どもの木を育てる。そしてこの子どもたちは親の木から栄養をもらって大きくなる。これを西本先生は「仕送り」と呼んでいた。そして仕送りをする子どもの中から優秀な蘖を残し、役割を終えた大人の木は枯れていく。このとき日差しが差し込み、スタートダッシュの早いホオノキは他の樹木よりも早く大きくなり優位な位置関係を得ることができる。だからホオノキが生えている場所はかつて大規模な伐採など大きな変化があったことが推測できると説明されていた。

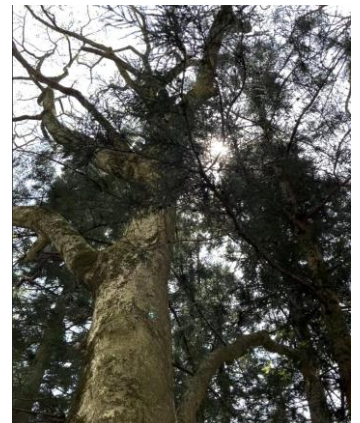


写真8. こどもに仕送りするホオノキ

また明治時代までは中国山地には多数のたたら製鉄が存在していた。毛無山もその麓では多くのたたら製鉄が営まれていたらしく、多くの樹木が伐採、炭に加工され、たたら製鉄の熱源として利用されていた。たたら製鉄には、砂鉄の他に、大量の木炭の確保が不可欠でした。1回の操業に、たたら炭約15t前後、森林面積にして1.5ha分の材木を使ったと考えられている。したがって、たたら経営には膨大な森林所有が条件でもあり、毛無山は地理的にその条件に合っていたと推測される。現に「毛無山」の名前は伐採が終わった後、丸ハゲになった山の外観を見て名付けられたと考えれば腑に落ちるし、ホオノキが多く生えていることからその説は有力になる。

さらに、観察が終わって1日の観察結果をシェアしているときに、僕の隣にいた参加者が「今日も拾っちゃいました。」と言って黒い奇妙な形をした石を見せてくれた（写真9）。それは何かが溶けて固まったような形をしていた。



写真9. この日採取された鉄滓

古代の製鉄技術「たたら」では砂鉄と木炭を粘土で作った窯に入れて1200℃以上で燃焼させ、鉄を製造する。その時に、砂鉄中に含まれる不純物は高温で熔融し、窯土などと反応し約半分が鉄滓（てっさい）となり捨てられた。その鉄滓は、ノロ、ケラ、金糞（かなくそ）などと呼ばれる。たたら製鉄で鉄を生産した折に出る不純物が混じった鉄になれなかったクズ。この鉄滓があるところの近くには何らかの製鉄が古代や中世、近世に行われていたことを示している。なぜかその鉄滓に強く惹かれた僕はその鉄滓が欲しくてたまらなかった。そんな思いが表情に出ていたのか、「今回の観察会の報告書を書いてくれたらコレ（鉄滓）をあげますよ。」と言われ、今こうして報告書を書いている。

自然観察とは自然にある動植物を観察して楽しむことだと思い込んでいた。しかし実際に講習会に参加し、体験会に参加し掘り下げていくと、ただ動植物を観察するだけでないことに気付かされる。それはまさに過去から未来へと時間が経過するほんの一瞬を観ているに過ぎない。そして自然の進化の過程のほんのわずかな一部分を切り取って観ることで、過去とこれから起きるであろう事象を分析する、そんな活動であると理解できた。



写真 10. 新緑の中での集合写真



写真 11. 田浪採草地での地掻き作業

e 自然保護活動のあり方

14 時に下山したあと、田浪採草地に移動して希望者はウスイロヒョウモンモドキの生息環境を復元する活動に参加した。エサ（食草）となるカノコソウを復活させることでウスイロヒョウモンモドキの生息環境を取り戻すことができる。1年かけて本葉が2枚から3枚に増えるための環境整備ということで、落ち葉や枯れ草を竹の熊手でひたすら除去する。作業をしながら、講習会で習った「自然保護の3つのタイプ」について考えていた。今回の活動はその中でもC型かR型の自然保護活動になるのだろう。



写真 12. スギ林からブナ林へ移り変わる毛無山の全貌

3 むすび

岡山県笠岡市の里山に移り住み10年が経過した。自然に寄り添った生活をこころざし、原発で作った電力を極力使わない生活を送ることをコンセプトに取り組んできた。途中、30年間勤めてきた教育職を早期退職し、今の生活に残りの人生を注ぐことを決めて3年が経過した。その3年目の終わりに自然観察指導員となった。これまで自然に寄り添った生活を送ってきたはずだが、何のために自然に寄り添い、自然を大切にするのか明確な目標はなかった気がする。幼少期、自然に慣れ親しんで生活していたためか、自然を大切にすることは自分にとっては当たり前のことだった。しかし、自然が存在し続けることが当たり前ではなくなった今、自然観察指導員となり、なぜ自然を守る必要があるのか、体系的に学びそれを伝える立場となった。体験型農家民宿を経営するようになり2年目、数あるアクティビティに「自然観察」を加えた。そしてこのGWの宿泊客で初めて自然観察を選んでいただけたのは大変喜ばしいことだった。これからも自然農、体験型農家民宿の経営を通して、自然保護の大切さを伝えていきたいと思ひます。末筆となりましたが、この度の自然観察会を主催してくださった西本先生をはじめ、NOI 岡山のみなさまに心からお礼申し上げます。

6 月 9 日午前中、総社市の鬼城山ビジターセンターで岡山県自然観察指導員連絡会 2024 年度年次総会、午後からは吉備史跡県立自然公園特別地域内の湿地を中心に、自然観察指導員の皆様による観察会が実施されました。

当日はあいにくの強い雨降りでしたが、奇跡的にフィールドワークの時間帯だけは雨もあがり、まるで私達の活動を後押ししてくれてるかのようでした。

観察会では西本先生を始め、様々な場面で活躍されている知見に富んだ方々による指導や助言をお聞きすることができ、参加したメンバーも感嘆仕切りでした。

また平素は立ち入ることが出来ない湿地を特別な配慮で観察することができ(写真1)、日本一小さなハッチョウトンボ(写真2)・雄が背中に卵を背負った育メンさながらのコオイムシ(写真3)・食虫植物のモウセンゴケ(写真4)・絶滅危惧種のサギソウ(写真5)・準絶滅危惧種のアカハライモリをはじめ、いろいろな動植物に出会うことが出来ました。湿地の周辺ではシュレーゲルアオガエルや準絶滅危惧種のトノサマガエルの鳴き声も聞こえていました。



写真 1. 特別保護区内に保護されている湿地



写真 2. ハッチョウトンボ (左: 成熟♂、右: 羽化中)



写真 3. コオイムシの雄の背中には卵がびっしり



写真 4. モウセンゴケを観察(左: 手のひらにおいて解説、右: 花が毎日一つずつ花茎の先端で咲く)



写真 5. 泥の中から出してサギソウを観察。左: 細かい部分を解説、右: 葉 3 枚、地下茎 3 本、球茎や地下茎にはラン菌の菌糸がつく

繊細で絶妙なバランスが保たれた湿地という生態系は、まさに小さな生き物たちの小宇宙のようで、観察すればするほど奥が深く、いつまでたっても飽きない魅力的なフィールドに思えました。

帰路は、参加者のみなさまと古代吉備の中心地であった総社平野や足守川流域の全貌を眼下に望み(写真6と7)、遠くは瀬戸内海や四国の山々も手に取るように見渡すことができる眺望を楽しみながら「豊かな自然」「貴重な歴史遺産」「素晴らしい眺望」の鬼城山三要素を実感する道すがらでした(写真8と9)。



写真8. 至る所に石積みがつくられていて、建設当時にはすでに高度な石積みの技術があったことを知ることができた(上3枚)



写真6. 眺望の良い場所で眼下に広がる景色を楽しむ



写真7. 雨も上がり、雲の切れ間から、足守川、総社平野、遠くには金甲山、瀬戸内海まで見渡せた



写真9. 復元整備された西門の遺構

これは余談になりますが、鬼城山の湿地もかつては消滅・破壊の危機を迎えたことがありました。

一般的に湿地はその平坦な地形も手伝ってか開発の波に飲まれやすいことは周知の通りです。鬼ノ城内の湿地も20年以上前に文化財保護の観点から、史実の謎解明という大義名分による発掘調査によって消滅の危機に直面しました。

しかし当時、鬼ノ城の謎の解明を図りたい人文科学の人たちと、貴重な自然を守りたい自然科学の人たちにより冷静な協議・検討がなされ、今日まで無傷で湿地が現状保存されています。

自然環境保護と文化財保護がお互いに相反する場面に直面することはよくあることですが、この鬼ノ城における当時の英断は、極めて賢明で高い賞賛に値することと思います。

最後に、観察会に特別な配慮をくださいました総社市環境課の職員のみな様に心から感謝を申し上げます。